

# 富山県内の移入魚

## ーオオクチバス・コクチバス・ブルーギルー

稲村 修

オオクチバス、コクチバス、ブルーギルは、北米大陸が原産の淡水魚で、ともにバス科（サンフィッシュ科）に属しています。後で述べますが、日本ではオオクチバスとコクチバスは、通称ブラックバスとも呼ばれています。これが世界中で様々な問題を引き起こしています。もちろん、日本国内も例外ではありません。では、富山県ではどのような状況なのでしょう？

富山県で確認されているバス科魚類は、オオクチバス、コクチバス、ブルーギルの3種で（表紙写真）、1980年に初めてオオクチバスが確認され、1990年にブルーギルが、2000年にコクチバスが確認されています。2000年～2002年に富山県内のバス科魚類について分布調査を行いましたので、その結果をもとに富山県内の分布状況を紹介したいと思います。

### ブラックバスが日本へ入ってきた歴史

原産地げんさんちのアメリカにおいて、「ブラックバス」という呼び名は、北アメリカ原産のバス科魚類の数種類を指している総称です。現在、日本では、それらのうちの、オオクチバスとコクチバスの2種が確認され、これらは、通称ブラックバスとも呼ばれています。

日本には、1925年（大正14年）に箱根はこねの芦ノ湖あしのこに持ち込まれたのが最初です。日本にブラックバスを持ち込んだのは、赤星鉄馬あらかばしてつ まという実業家です。赤星氏はアメリカで生活したことがあり、釣って楽しく、食べて美味しい魚ということで、当時、アメリカから持ち出し禁止になっていたのを日本に持ち込んだのです。

この当時の芦ノ湖は、サケ・マス類さけ・ますの増殖もうまくいっておらず（現在はニジマス、ブラウントラウト、サクラマス、イワナなどが生息しています）、地域産業振興の目的もあったようです。ただ、当時からブラックバスによる日本の在来種ざいらいしゅへの影響は懸念けねんされており、持ち込んだ赤星自身も分かっていました。そのため、芦ノ湖からの持ち出しは禁止されていたのです。

記録によると、このとき持ち込まれたのは、オオク

チバスとコクチバスの2種でしたが、芦ノ湖で生き残ったのはオオクチバスだけ、コクチバスは定着しませんでした。そして、この後、オオクチバスは全国的に分布が広がり、「ブラックバス」と言えば「オオクチバス」のことを指していました。

しかし、1991年ころから、長野県ながのの木崎湖きざきこや福島県ふくしまの桧原湖ひばらこで、コクチバスの姿が見られるようになりましたが、それが日本に入ってきた経緯については分かっていません。その後、コクチバスは急速に分布を広げて全国的に見られるようになっていきます。現在では、ブラックバスという呼び名に、オオクチバスとコクチバスが含まれているわけです。

### オオクチバスとコクチバス

オオクチバスはその名のとおりに口が大きく、口のこう後端たんは眼より後方に達しています（図1下）。一方のコクチバスは、口の后端が眼の後端に達していないことが特徴で（図1上）、オオクチバスと区別できます。名前を聞くと口が小さいように思われますが、そんなことはありません。「オオクチバスよりわずかに口が小さい」程度です。そのほか、背鰭せびれと尻鰭しりびれの付け根を見ると、オオクチバスでは鱗がないのに対し、コクチバスでは細かい鱗がびっしりと付いている点でも区別できます。

オオクチバスは成長すると全長60cmを越すものがあります。一方、コクチバスは全長50cmほどと、やや小型です。

オオクチバスとコクチバスでは、「冷水に対する適応性てきおうせい」や「流水に対する適応性」の違いが指摘されています。生息可能な温度はほとんど同じですが、産卵水温がオオクチバスで16℃以上に対し、コクチバスでは13℃以上と比較的低いことが知られおり、コクチバスの方が低温に強いことが分かります。また、コクチバスの方がより流速のある溪流域りゅういけのういきにも入り込むことが知られています。

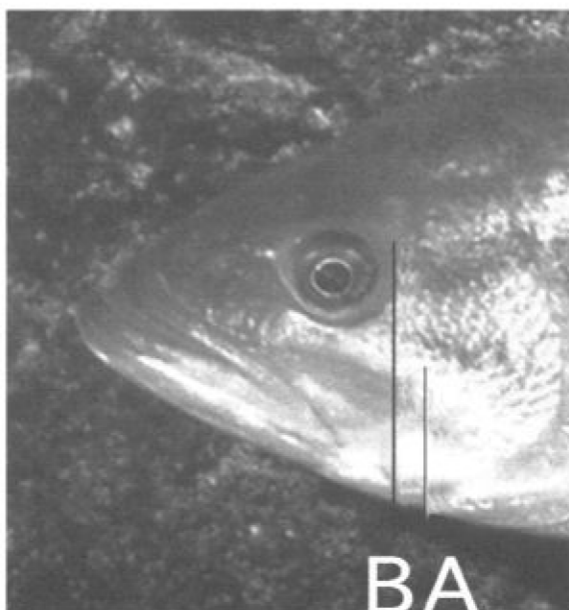
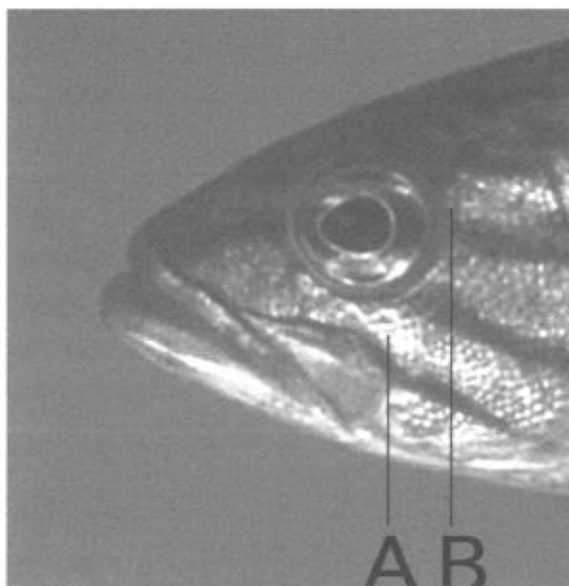


図1 コクチバス（上）、オオクチバス（下）の口の位置の違い。（A：上あごの後ろ、B：眼のうしろ）

オオクチバスもコクチバスも食欲な魚として知られ、魚やエビ・カニ類、昆虫、カエル、ヘビ、ときには水鳥のヒナも食べることが知られています。そして、もう一つの大きな特徴は、その繁殖生態です。産卵は溜池やダム湖など流れの弱い場所で行われます。繁殖期は春～初夏で、5～7月ころ、オス親は水深1～2メートルほどの水底にすり鉢状の巣を作ります。そしてメス親を誘って産卵させたあと、オス親は卵や稚魚を保護し、他の魚が近づくと激しく追い払います。

オオクチバスでは、孵化後の稚魚が群になっており、オス親がしばらく稚魚を守っています。一方、コクチバスでは孵化後の稚魚を守る期間は短く、稚魚は水面近くに浮いています。

稚魚を守る期間に差はあるものの、このようなオス親が卵や稚魚を守る習性が、日本で爆発的に繁殖した理由の一つと考えられます。

## ブルーギル

ブルーギルは、エラブタの縁に青っぽい（濃紺）斑紋があることから、ブルー（青い）ギル（エラ）と呼ばれています。原産地はブラックバスと同様に北米大陸です。

日本に持ち込まれた経緯は、1960年に皇太子殿下（当時）が、日米修好百年記念式典で訪米の際、記念の品としてシカゴ市長より贈られました（シェッド水族館所有の18尾）。その後、淡水区水産研究や滋賀県水産試験場で利用が研究されましたが、結局、実用化されませんでした。

1965年に琵琶湖（西の湖付近）でブルーギルが初確認されており、また、1966年に淡水区水産研究所が、静岡県の伊豆にある一碧湖に自然水域としては初めてブルーギルを放流しました。

この後、アメリカにおけるオオクチバス移殖の際にエサとしてブルーギルを放流する「アベック放流」が紹介され、日本各地でブルーギルがオオクチバスと一緒に放流されました。また、琵琶湖産稚アユ種苗に混じって、各地に広がったとも考えられています。ブルーギルについては、以前、神通川に放流するために購入した琵琶湖産アユ種苗に混じっているのを確認しています。

ブルーギルは成長しても全長25cm ほどです。雑食性で植物も食べますが、動物性のエサを食べていることが多く、昆虫やエビ・カニ類、稚魚や魚卵などを食べています。

ブルーギルもブラックバスと同じように、オス親が産卵床を作って、卵や稚魚を守ります。このような習性は、生存競争が厳しい北米大陸で培われたのでしょう。日本の在来種では、このような子育ての習性を持つ魚は少なく、生存競争では負ける場合が多いのです。

## 富山県内の生息の様子

2000年から2002年に行った富山県内での調査地点は、

32水系で101地点でした。そのうちで、バス科魚類が確認されたのは、15水系45地点です。確認地点を図2に示しました。

オオクチバスのみが確認されたのは33地点（●）、オオクチバスとブルーギルの2種が確認されたのは9地点（◎）、はブルーギルのみが確認されたのは1地点（○）、オオクチバスとコクチバスの2種が確認されたのは1地点（★）、コクチバスのみが確認されたのは1地点（☆）です。

オオクチバスが確認されたのは、計43地点（●33地点+◎9地点+★1地点）で、確認地点45地点のほとんどでオオクチバスの生息が確認されています。

オオクチバスの分布状況は図2を見て分かるとおり、氷見市や小矢部川水系の小矢部市や福光町、そして、小杉町といった県西部に集中しているのがわかります。これに対して県東部では、中山間地に点在しています。これは県西部において、オオクチバスの生息に適した農業用の溜池が数多く集中的に存在しているからです。一方の県東部では溜池が少なく、主に河川にあるダム湖で確認されています。また、河川の下流域は、県西部では流れのゆるい場所で確認されましたが、県東部では流れが強く、全く確認できませんでした。

コクチバスは庄川水系の二つのダム湖でのみ確認されました。岐阜県との県境にある境川ダム（別名：桂湖）（図3）で、2000年に確認されたのが富山県初記録で、2001年には大量の稚魚が見られ繁殖も確認されました。2002年には、境川ダムの下流の庄川本流に位置する小原ダムでもコクチバスが確認されています。なお、境川ダムでは、2002年にオオクチバスも確認されています。

ブルーギルは氷見市や小矢部市といった県西部に分布が集まっています。また、10地点で確認されたうちの9地点でオオクチバスと一緒に確認されています。

次に特徴的な地点を見てみると（図3参照）、城端町の桜ヶ池（図4）は1980年に富山県でオオクチバスが初めて確認された場所の一つで、以降、数回、水抜きがされていますが、その度、人為的な放流が繰り返されています。

氷見市の仏生寺川下流部は、国指定天然記念物の淡



図2 富山県内の外来種の分布



図3 境川ダム

水魚「イタセンバラ」の生息地ですが、オオクチバスとブルーギルが確認されています。今回の調査と別に行った釣りによる調査では、2001年9月26日に釣り上げたオオクチバスの胃内容物としてイタセンバラ1尾が確認されています（図5）。

小矢部市の子撫川ダム（図6）は1980年に富山県でオオクチバスが初めて確認された場所の一つで、1990年にはブルーギルも富山県内で初めて確認された場所です。

上市町の「片地の池」は、2001年の釣り調査では確認できませんでしたが、管理者からの聞き取りで、2000年に水抜きをしてオオクチバス数十尾を駆除したことが分かりました。この池ではオオクチバス5尾を違法に放流しようとした会社員が、2000年11月に富山県警に摘発されました。これが、全国で唯一のバス科

魚類の違法放流の検挙例となっています。

黒部市の大谷ダムは、1998年に完成した新しいダムで、釣り人からの聞き取りで「釣り人がオオクチバスを持ち込んでいる」という情報が得られています。また、県東部では唯一、ブルーギルの生息が確認されました。アユの放流もないので、釣り人による違法放流が原因と考えられる地点です。

朝日町たなやまの棚山西池は、2000年の調査ではオオクチバスは確認できませんでした。しかし、2001年には多数のオオクチバスを確認しました。その一方で、2000年に確認されていたメダカとモツゴが姿を消しました。これは、繁殖したオオクチバスの幼魚に食べられた可能性が高いと考えられます。棚山西池では2004年現在も、オオクチバスの駆除を進めてきています。2003年からモツゴの姿が少し見られるようになりましたが、メダカは全く姿を見られなくなっており、絶滅した可能性が高いと思われます。

#### バス科魚類の今後

2004年5月に「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律案」が国会で議決されました。国内に持ち込まれ野外に逃げ出した場合、被害が生じる恐れのある生物の持込を規制するためのものです。

しかし、国内に持ち込まれてしまっている移入種はどうなのでしょう？

バス科魚類に関しては各都道府県で条例で規制されており、富山県では内水面漁業調整規則ないすいめん（1993年4月1日公布）により、知事の許可なく放流することを禁じています。しかし、現在でも各地で違法な放流が続いているようです。バス釣りをしたいために、他の生物への影響を考えずに違法な放流をしているのでしょう。バス科魚類の放流で直接的に被害を受けるのは、人間ではありません。しかし、在来の生物が絶滅に至るような被害を受ける場合も少なくありません。そして、絶滅した生物は現在の技術では二度と復元できません。

以上のことは、バス科の魚に責任があるわけではないでしょう。魚の習性を考えれば簡単に予想されることです。つまり、悪いのは違法放流を続けている人間



図4 桜ヶ池

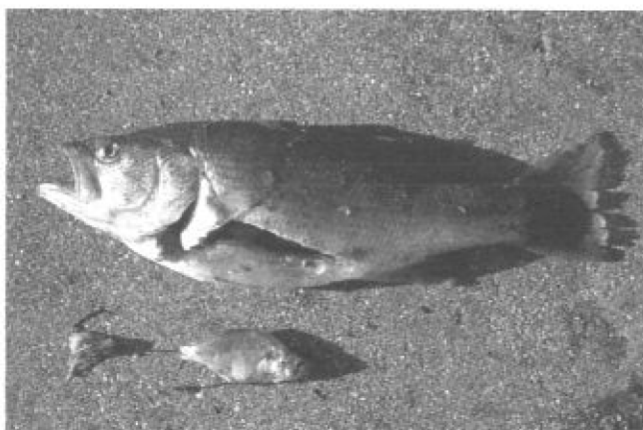


図5 仏生寺川で釣り上げられたオオクチバスと胃のなかからでてきたイタセンバラ



図6 子撫川ダム

です。また、影響がわかっていてバス釣りをして、再び放流している釣り人にも考えてもらいたいことなのです。

水の中という人の目に見えにくい場所で、移入生物による自然破壊が進んでいるのです。

(いなむらおさむ：魚津市教育委員会)